

スクーバ・ダイバーの楽しさに関する調査研究

○千足耕一（十文字学園女子短期大学） 大石示朗（東京女子体育大学）

keywords : SCUBA ダイビング, 楽しさ, 満足, アンケート調査

【はじめに】

スクーバダイビングは最近3年ほど認定証（Cカード）を取得する人数が少しずつ減少傾向を示していると言われている。しかしながら年間に7～8万人が新規にダイビングを開始していると予測されており、現在のダイバー人口は89万人とみられている⁷⁾。千足らは、ダイバーの活動継続²⁾、ダイビングを行う動機やダイビング中の心理状態などについて調査研究³⁾を重ねてきたが、「どのような人々が何を求めて参加するか」ということについてさらに詳しく調査することが課題となっている。1999年3月のレジャー・スポーツダイビング産業協会による222名を対象とした調査⁷⁾においては、ダイバーの活動目的の第1位に「楽しみのため」が選択率48.6%であげられ、次いで「興味・関心のため」が選択率16.7%となっている。この「楽しみ」あるいは「楽しさ」については、十分に検討する価値や必要性がある。

ダイビング中にどんな感じがしたかを尋ねた千足（1995）の調査結果³⁾では、「バディーの動きに注意している（75.4%）」「体が軽くなったような気がする（72.0%）」「自然と自分とが一体となっている（66.4%）」といった項目において選択率が高いという結果であった。この調査では、夢中になっている時の感覚を検討したが、今回の調査では「ダイビングにおける満足」、「楽しかった経験」に関する自由記述、「楽しかった時の状態」「楽しかった時の気分」について分析を試みた。

【研究の方法】

Cカードを取得しているダイバーにアンケート用紙を用いて回答を求めた。アンケートの記入については、クラブなどの代表者に依頼し配布してもらったもの、ダイビングショップに留置してもらい記入してもらったものがある。1999年3月から9月の間に配布・回収し、回収総数は148通であった。これらを分析の対象とした。回答者の平均年齢は25.8歳（SD=6.70）、平均タンク経験本数は152.8本（SD=515.7）であり、男女比においては男性が35.9%、女性が64.1%であった。未婚者が83.4%を占め、既婚者は16.6%であった。アンケートは、ダイバーに直接記入してもらう自記式質問形式であり、無記名でおこなった。調査内容として Beard and Ragheb (1980)¹⁾の作成した Leisure Satisfaction Scale (LSS) を一部ダイビング用に修正した調査用紙と、西嶋・太田ら（1994）が一連の研究⁵⁾ ⁶⁾において行った、M. チャットマイのESM項目を野外活動版に修正した調査項目を用いた。データの分析・統計処理にあたってはSPSS for Windows 8.0Jを用いた。分析にあたっては全体結果を概観し、加えて経験による差異、性別による差異を検討するためにt検定を行った。危険率5%以内の場合に有意差ありと判定した。なお、経験はタンク経験本数50本未満を初・中級者群（59名）、タンク50本以上を上級者群（70名）として分類した。

【結果と考察】

1. ダイビングにおける満足について

満足についての24項目は、5件法で回答を求め、（非常に満足している：5点）から（全く満足していない：1点）を与えた。「24. 神や宗教について考える」以外の全ての質問項目では、中央値（どちらともいえない：3点）以上を示し、レジャー活動としての満足度は高いといえよう。平均値の高かった順に「6. 自然は美しい（4.60）」、「興味があって面白い（4.51）」「仲間の人は友好的である（4.47）」があげられ、その他9項目でも平均点が4.0を超え、高い値を示した。満足に関するキーワードは「仲間」、「自然」、「興味と新しいことがらへの挑戦」、「くつろぎとストレス解消」、「好き」、「達成感・充実感」があげられる。

経験による差異を検討したところ、「3. 本当に親しい友人を作ることが出来る」、「4. くつろいだ気分になる」、「5. 身体的な疲労の回復になる」、「10. ストレス解消に役立つ」の4項目においては上級者群が有意に高く、「13. やり遂げた後の達成感や充実感がある」、「14. 新しい事柄に挑戦する機会を与えてくれる」の2項目は初・中級者群において有意に高かった。初・中級者においては経験したことの無い技術や状況からの刺激により満足し、上級者においてはくつろぎやストレス解消に満足を得ていることが示された。

満足についての性差を検討したところ、「4. くつろいだ気分になる」、「10. ストレス解消に役立つ」の2

項目では男性が高く、「11. 体力の増進になる」では女性が有意に高いという結果であった。千足の動機における調査結果³⁾において、男性が女性に比べ「のんびりするため」で、女性が男性に比べ「体力をつける」項目においては有意に高かったという調査結果を支持する結果となった。

2. 「楽しかったこと」に関する自由記述から

「楽しかったこと」とその時の仲間との関わりなどについて質的な検討を加えるために、自由記述を求めた。回答総数 148 サンプル中 119 件において記述が見られた。「楽しかったこと」に関する記述では、「魚の群れ」、「生物の共存・生態」、「日本の四季」、「自然の営みの奥行き」の深さ、「こんな世界があるのか」、「浮かんでいる時の気分」、「南の島」、「都会と違う環境」、「透明感」などをキーワードとする記述が多く見られた。ある回答では経験により「驚き」→「充実感」→「目標」→「楽しみ方」へ変化してきたとの記述も示された。仲間との関係では「信頼」、「安心」、「共通体験」、「共感」といった表現が多かった。考えたこと・感じたことは、「幸せだなあ」、「無心」、「気持ちいいな」、「何も考えていない」、「時間がとまって欲しい」、「感動」、「興奮」、「生きている実感」などの言葉で表現されていた。ダイビングにおける楽しさには、自然に関する体感といったような要素が存在していると考えられることができるだろう。

3. 「楽しかった時」の状態について

楽しかったときの状態を、22 の質問項目について 4 件法で回答してもらった。(全くそのとおり：4 点) から (全くあてはまらない：1 点) を与え、平均値を求めた。「2. 満足感・充実感があった (3.66)」「1. 嬉しかった・幸福だった (3.63)」が顕著に高い数値を示した。

経験による差を検討したところ、「12. 自分は完全に機能していた」という項目のみにおいて上級者群が初・中級者群より有意に高い数値を示した。性別による差では、「15. 自然の全体が見えていた」の 1 項目において女性が男性に比べ有意に高かった。

4. 「楽しかった時」の気分について

「楽しかった時」の気分を、対をなすと考えられた 36 項目について、どちらともいえないを中央とした 7 件法で回答を求めた。全体では「興奮」、「活動的」、「美しい」、「神秘的」、「ほがらか」、「溶け込む」、「すがすがしい」、「静か」、「熱中」、「広大」、「幸せ」、などの言葉に近い数値を示した。

経験による差を検討したところ、13 項目において差があり、初・中級者群は上級者群と比較して、より「チャレンジ」の方向へ、上級者群では初級者群よりも、「軽い」、「豊富」、「美しい」、「広大」、「安定」、「らく」、「自由」、「幸せ」、「すがすがしい」、「暖かい」、「優しい」、「親しみ」といった方向へ数値が位置するという差が見られた。性差をみると、男性は女性に比べ「すがすがしい」、「動的」、「地味」といった方向へ数値が位置していた。

【文献】

- 1) Beard JG. and Ragheb MG. (1980) Measuring Leisure Satisfaction, Journal of Leisure Research, Volume12:20-33.
- 2) 千足耕一 (1995) スポーツ活動の継続性に関する研究—スクーバダイビングの場合—, 筑波大学体育センター大学体育研究第 17 号 : 1-12.
- 3) 千足耕一・吉田章 (1995) スポーツダイバーの動機とフロー経験に関する研究, 筑波大学運動学研究第 11 巻 : 97-105.
- 4) 千足耕一・川田儀博・永嶋秀敏 (1999) スクーバ・ダイバーの活動継続要因に関する調査研究, 国士舘大学体育学部附属体育研究所所報第 17 巻 : 71-80.
- 5) 西嶋尚彦・太田茂秋・日下裕弘・富樫泰一 (1994) 野外志向のレジャー・スタイルに関する価値意識研究 (その 4) E S M 項目の修正, 茨城大学教養部紀要第 26 号 : 529-550.
- 6) 太田茂秋・日下裕弘・富樫泰一・夫基源・松坂晃 (1994) 野外志向のレジャー・スタイルに関する価値意識研究 (その 5) 「野外活動のフロー」調査 : 大学の山岳・ワンダーフォーゲル部員, 茨城大学教養部紀要第 27 号 : 287-313.
- 7) (社) レジャー・スポーツダイビング産業協会 (1999) ダイビング産業に関する調査研究報告書, (社) 日本機械工業連合会, 東京.